旅をしていた日々の記憶

門田 岳久（かどた たけひさ）
東京大学大学院総合文化研究科

お遍路さんの日常

二〇〇六年の夏のある日、居候（いそうろう）をしていた家の居間から御詠歌を唱える声が聞こえてきた。御詠歌とは仏教の教えを和歌調にしたもので、巡礼のときに歌われる。宗派や地域ごとに独特のメロディーがあり、慣れるまでにはちょっとした練習が必要だ。この家の主人は何度も四国遍路を経験した人なので、近々巡礼を始めてみようと思っている友人や親戚などが教えを請いに集まって、こうして御詠歌の練習会をやっていたのである。

しばらく聴いていると、やはり先達（せんだつ）とビギナーの違いがわかってきた。まだ始めたばかりというおばさんの御詠歌はひとつひとつの単語がクリアに発音され、教本を「読み上げている」という感じがしたが、先生役のおばさんの方は、ことばが数珠繋ぎとなって流れるような響きをもっていた。上手い読経とは何を言っているのかわからないように詠じることだ、と知人の僧侶が冗談交じりに言っていたが、それは御詠歌も同じようだ。

日本海に浮かぶ島、佐渡。一〇年ほど前から四国遍路が静かなブームと言われているが、この地域にはそれ以前から熱心に巡礼をおこなっている人びとがたくさんいた。とはいえ遠い巡礼地にそうたびたび行けるわけではない。先立つものが必要だし、何より普段の生活があるからだ。当たり前だが、「お遍路さん」は常に「お遍路さん」なのではない。日常には日常の仕事や、家や街の出来事があって、他の人と同じように過ごしており、何年かに一度、それも数週間のあいだ白装束に身を包むだけの話である。ただ彼らが違うとすれば、他の人より少しだけ熱心に念仏を唱えていたり、あるいはまた巡礼の旅の指南役を頼まれたりすることだ。日常の暮らしのなかで巡礼経験者は、あらたな旅人を育てているのである。

事足りることと満ち足りることは別

佐渡を「島」という響きでイメージしていると、まずその広さに驚く。面積は東京二三区より大きく、車で島を一周しようとしたら軽く一日が終わってしまう。必要なものはだいたい手に入るし、中心部に行けば大手レンタルビデオ店もある。大学はないけれど、いくつかの高校と専門学校はある。世帯所得は本土の六割程度と言われ、仕事は少ないものの、相互扶助的なシステムが強く、生きていくのに困るほどではない。つまり島で暮らすということは、かなりの程度島のなかだけで事足りると言うことでもある。

だが事足りるということと、満ち足りることとは別のようだ。いいところですねとわたしが言うと、「まぁたまに来る分にはな」と地元の人は笑って答える。島の内である程度生活が成り立つと、逆に外へ出る機会が見つからなくなってしまう。島の暮らしにはまた、一種の閉塞感があるのだ。この地域では島の外のことを「旅」といい、島外から来た人間を「旅の者」と称するが、その響きにはよそ者への警戒感というよりは、外を知っている者への羨望の意味合いが込められているように思う。島というのは、新しい技術や知識はほぼ全て外からやってくる。だから外の文化を無条件に正しいとみなす人が多い、ということを言っていた人がいたが、なるほど確かに佐渡では、街作りのあり方をめぐって地元の意見が対立したときなどに、旅の者の意見がすんなりとおることが案外多い。

そんなわけで、島の暮らしにおいて旅は独特の意味合いをもつ。別に永遠に帰ってこないわけではない、でも少しだけ抜け出して外の世界を生きてみたい。巡礼も、島で暮らす人びとにとって旅に出るひとつの方法である。もちろん今では観光旅行で自由に出られるが、巡礼は、信仰心と観光気分を同時に満たす伝統的なツーリズムだったのである。

みんなが良い経験をしている

さて、巡礼経験者があらたな旅人を育てると言っても、わざわざ布教活動をするわけではない。それでも自然と巡礼に関心をもつ人が出てくる背景には、旅から戻った人が自分の経験を周りに語り継いでいくことの役割が大きい。

おばあさんたちの茶飲み話のときに、ある人がこんな話をしていた。四国八十八ヵ所をめぐったときは、毎日が体力勝負で感慨にふける余裕もなかったのだけど、いちばん最後の高野山に参ったときに見た菩薩像の顔が、どういうわけか幼いころに亡くした母の顔に見えて、その瞬間に全身の力が抜けて自然と涙がこぼれ落ちた。あのときの御顔がとても記憶に残っている、と。

巡礼にせよ島外での仕事にせよ、「ここ」ではない別の場所でおこなわれた旅の経験は、記憶をことばにしない限り他者には伝わらない。この奇跡譚のような巡礼経験の語りはある種のパターンをもっていて、誰が話してもじつは大差はないのだが、聞く側にとってはその分、「みんなが良い経験をしているんだ」と感じることができる。こうした語りはちょっとした集まりのときの世間話によく出てくる。そして話を聞いて巡礼に興味をもった人が、御詠歌を教えてくれと先達のところにやってくるのが、冒頭の練習会だったのである。

そういえばフィールドワーク中、わたしは「旅の若い兄ちゃん」と紹介されることがあった。ふらっとやって来てまた帰って行く人類学者などというのは旅人の典型だ。巡礼の思い出を盛んに語るおばさんたちを見て、最初は随分話し好きな人たちだと思っていたのだが、こうして旅＝フィールドの日々の記憶を語っているわたしも、じつは同じ部類のようである。

巡礼の際、宿主（右から２人目）は毎回現地のタクシーを手配する。
１回目の巡礼（写真左）では親族３人だったが、行くたびに同行者が増えている（写真右）

巡礼中に貰った「納め札」はきちんとアルバムに整理されている

集落のお盆での祈りの様子。読経の練習はこうした場面でも役に立つ

海と山に囲まれた調査地の街